

そして、この「公正證書」の末尾には次の様に記されている。

右列席者ニ讀聞カセタル處一同之ヲ承認シ各
自左ニ署名捺印ス

深川重義 ㊦
小野村胤敏 ㊦

本證書ハ昭和拾壹年拾壹月參拾日法定ノ方式
ニ從ヒテ作成ス依テ左ニ署名捺印スルモノ也

大阪地方裁判所々属
大阪市南區八幡町九番地
公證人 竹井小野右衛門 ㊦

日本大學「總長」「代表者理事」
山岡萬之助(その「代理人」で「中
學校長」の深川重義)と「専門學校長」
小野村胤敏を「當事者」とする「教
育ヲ目的トスル財團法人設立ノ爲メ
ニスル財産移轉ニ關スル契約」の内
容は、纏め直すと次の様になるう。

「昭和拾壹年拾壹月貳拾日」の日本
大學の「理事会」決議に從つて、「當
事者日本大學代表者理事山岡萬之助」
は、独立経営の財團法人「大阪日本
大學學園」の「創設」の為に、大阪
日本大學學園に属する「全財産」を
「日本大學専門學校長ニシテ大阪日本
大學學園管理者タル小野村胤敏ニ移
轉シ且占有ノ引渡」を為し、「日本大
學専門學校長ニシテ大阪日本大學學
園管理者タル當事者小野村胤敏」は
それを「承認ノ上之カ所有權其他ノ
財産權ノ移轉並ニ占有ノ引渡ヲ受ケ」
てそれに基く「財團法人設立ノ寄附
行爲」をして「認可申請ノ手續ヲ執
行」ことにする。そして、当該財團
法人設立の為に「當事者日本大學代

表者理事山岡萬之助」から「日本大
學専門學校長ニシテ大阪日本大學學
園管理者タル當事者小野村胤敏」が
「所有權」「財産權」の「移轉」「占有
ノ引渡」を受ける「全財産」として
は、「大阪府中河内郡彌刀村大字小若
江」の「小計拾四筆 五千五拾四坪」、
「同府同郡小阪町大字上小阪」の拾五
筆「小計壹千貳拾坪」の「總計六千
七拾四坪」の「土地」、そこに建設さ
れている「鐵筋コンクリート」校舎
貳棟、「木造瓦葺」校舎貳棟、「木造瓦
葺」講堂壹棟、「木造スレート瓦平屋
建校舍附属便所」が列挙され、更に
「備附在之什器々具等ノ備品壹切」と
されている。そして、この「公正證書」
の末尾には、「列席」及び「承認」し
たととして、深川重義と小野村胤敏が
署名・捺印している事からも、實際
にはこの両者がこの「證書作成」の
為に「陳述」したと判断される。

以上から判明するのは、山岡萬之
助先生を経営上の中心とした日本大
學側は日本大學専門學校設立直後の

大正十五年には、同大學に財政的ダ
メージ及ばないよう、「大阪日本
大學財團」として一定のコントロー
ルの元に独立的に経営せしめる方針
を固めており、昭和十一年に財團法
人の「創設」の為に同校の新校長小
野村胤敏先生に「大阪日本大學學園」
に属する「財産全部」の「所有權其
ノ他財産權」の移轉をしたという事
であるう。それが昭和十一年に行わ
れたのは、前回の報告から明白な如
く同専門學校の設立時からの榊原坤
作先生とその協力者深川重義の運営
がこの当時に行き詰り、財政支援(国
立公文書館所蔵「大阪専門學校 大
阪 第5の2冊」の第二文書「日本
大學専門學校校舎増築認可」附属文
書によれば、「日本大學専門學校校
舎建設資金」としての「貳萬圓(寄附)
した小野村胤敏先生が同専門學校校
長に就任した時期だからである。そ
して、昭和十一年十一月十二日発行
の『官報』第二千九百六十號掲載の
「文部省告示第三百五十號」(昭和十
一年十一月十二日)に「大阪府中河
内郡彌刀村ニ設置セル日本大學大阪
中學校ノ位置ヲ昭和十一年十一月ヨ
リ大阪府大阪市東淀川區ニ変更ノ件
昭和十一年十一月十日認可セリ」と
ある様に、深川重義が事実上創設し
て校長を務めていた日本大學大阪中
學校が移轉した事も、前述の事と関
連しているのは、此処で今更喋々と
謂うを俟たない。

(近畿大學名誉教授
建学史料室特別研究員 荒木 康彦)

追記

本報告で掲げている『官報』は何
れも国立国会図書館デジタルコレク
ションで閲覧して利用した。

近畿大學関係者のみは「先生」と
したが、それ以外の人士については
敬称を省いているので、この点は諒
とされたい。

学外訪問調査

学校法人西南学院

西南学院史資料センターでの
聞き取り調査報告

本研究プロジェクトで実施してい
る各地のアーカイヴズの訪問調査と
して、二〇一八年八月三〇日に西南
学院史資料センター(以下、資料セ
ンター)にて聞き取り調査を行った。
調査には資料センター事務室長であ
る前田誠史氏(調査当時)と同調査
役の篠田裕俊氏(調査当時)、同主
幹の世戸口尚英氏にご協力いただい
た。また、調査担当は教職教育部の
富岡勝教授と九州短期大学の三木一
司准教授(共に建学史料室研究員)、
建学史料室室員(調査当時)の木村
道子、そして報告者の四名であった。
調査内容は資料センターの設立経緯
と組織形態、活動内容を中心とし、
その他については聞き取りを行う中
で随時何うという形式で行った。
西南学院は米国南部バプテスト派
宣教師のC. K. ドージャーが創立
者となり、一九一六年に福岡市初の



西南学院大学史資料センターの入る西南学院百年館(松緑館)

男子私立中学校として私立西南学院を開校したことに始まり、二〇一六年創立一〇〇周年を迎え、訪問した資料センターは二〇一六年に開設された。資料センターが設置されている百年館は、資料センターの展示スペースをはじめ、同窓会の機能も備えており、来訪者が交流できる空間も確保されていたのが印象的であった。



西南学院百年史編纂委員会による刊行物

開設に至る経緯として、かつて学院史編纂室にて七〇年史が編纂された当時より史資料の保存や整理を行う部署の必要性が認識されはじめ、一九九四年十一月八日に当時の理事より『西南学院歴史資料館設置の必要性について(意見具申)』と題した文書が理事長および院長・学長宛に提出され、具体的な言及がされた



展示室内

という。その後、百年史編纂準備委員会や常任理事会にて資料センターの設置が検討されてきたという。西南学院は保育所から大学院まで擁するため、院長が資料センター長を兼ね、運営委員は学院の各学校・園・事務局から出され、また資料センターの職員により運営がされている。資料センターでの当時の活動内容としては、『西南学院百年史』の編纂にかかる監修作業に加え、年に一回、各部署から統計資料の収集を行い、その更新や、刊行物の収集、ホームページ等にて卒業生から提供される史資料の受け入れ等を行い、史資料の発表として常設展示のほか、年に一回企画展示会を実施しているという。また、百年史の編纂作業と共に研究活動も行わ

れ、二〇〇六年から二〇一七年まで『西南学院史紀要』が十二号まで発行されたほか、過去に何回か刊行された創立者の生涯を『Dozier「ドージャー」西南学院の創立者 C. K. ドージャー夫妻の生涯』として日英対訳版にて刊行し、式典等にて配布されたという。そして、神学部の開講科目として自校史教育が全学生を対象にオムニバス形式で開講されており、資料センターは授業に対する支援を行ったり、各部署からの調べ物や、学生の卒業論文執筆時のレファレンスを行う等、多様な活動が行われていることが伺えた。

様々な取り組みが行われている中、同窓生との繋がりやの深さを伺えるお話もあった。例えば、六〇周年を越えた管弦楽団より史資料が移管・保存され、一〇年ごとに発行される記念誌の史資料の提供や、一九一九年に創設されたグリークラブの記念誌作成に向けた史資料整理が行われていること等である。このような活動を通じることにより、同窓生と資料センターの間に頻繁なコミュニケーションが取られ、活動の活性化が行われていると思われる。

また、百年史編纂については百周年の約一〇年前となる二〇〇五年より編纂事前準備が始まり、百年史編纂準備委員会等にて作業内容に関する検討が進められ、二〇一〇年に百年史編纂委員会が立ち上がったという。かつて、『西南学院七十年史』の刊行はあったが、作業に携わった方が一部であったため、百年史の編纂においては西南学院の歴史の各場面に関わった多くの方が執筆することになり、執筆者は八〇名以上になるとのことであった。そのため、執筆要領はあるが確認作業を細かく進めているという。今後、百年史編纂過程で得られた結果を展示に活用していくことも念頭に各種作業が進行中であるとのことであった。

限られた訪問時間ではあったが、様々なお話を伺うことができ、聞き取りの後は史資料の保管庫の見学と詳細な解説もいただいた。百周年に向けて様々な取り組みが始まっている本学において今回の調査内容は非常に参考になると思われる。

(国際学部准教授
建学史料室研究員 酒匂 康裕)